

書 評

Alison J. Murray. *No Money, No Honey: A Study of Street Traders and Prostitutes in Jakarta*. Singapore: Oxford University Press, 1991, xxi+159 p.

I

新秩序体制下、特に80年代以降のジャカルタの発展はめざましく、暗くて猥雑な途上国都市のイメージを抱いてきた来訪者は、高層ビル群のつくるスカイラインの威容に驚嘆する。高層ビルだけではない。ここ数年の間にできたばかりのショッピングモールはシンガポールのそれとなんら変わりなく、ジャカルタの新しい盛り場となっている。都心に郊外住宅地とつぎつぎと誕生するこうした消費基地は、富裕層だけでなく、いままでパサールをぶらついて時間を潰していた層をも引き込みつつある。中・高生たちがウィンドウ・ショッピングを楽しむ様子は、ジャカルタの消費文化が確実に変わりつつあることを示している。

本書は、こうした急激な消費社会化をふまえてオーストラリアの若手研究者が著した、ジャカルタのカンボンの、特にワルン（露店）の女たちと娼婦に関する研究書である。著者は、マンガライ地区やブロックM地域等でのフィールド・ワークを通じて、ジャカルタにおける女たちの生活と意識の変容を追いつつ、インドネシアにおいて機能する国家のイデオロギーと消費社会化の進行を解明しようとしている。現代インドネシアの階級と性そして消費文化について論じた研究はこれまであまり多くはなく、対象の指定自体からして画期的な一書といえよう。以下、著者の議論を簡単にまとめてみたい。

II

インドネシアの国家を見る著者の主要な関心は、国家的イデオロギーから生まれる女のイメージに向けられている。ミシェル・フーコーの「真理の体制」(regime of truths)を糸口に著者は、主婦として母親としてか弱いが輝いているというイブ（既

婚女性または母親）のイメージが、スハルト体制下で国家の開発戦略と結び付けられ、階級と性、権力そしてそれらに潜む対立的状況を隠ぺいする働きをしていることを明らかにする。さらにそのイメージの背景にあるイデオロギーは、戦後のインドネシア研究において民衆の政治的従順さを過大視する文化主義的アプローチ（具体的な批判の対象はC. ギアツとB. アンダーソンである）によって支えられているとして、国家権力と知の共犯関係が暴かれ、インドネシア的「真理の体制」とはなにかが示される。そしてイブのイメージがイデオロギー的虚構に過ぎないことを立証すべく、著者は首都ジャカルタの「都市の幻影」の下に隠れた日常へと降りていく。

ジャワの伝統を再現しかつ比較的イスラム色の強い地域であるマンガライに住んだ著者は、ワルンを商う女たちの生活を観察する。富裕層の都会的な高級文化の示す「都市の幻影」の無制限な成長の一方で、相互協力によって支えられた貧困層の日常。女たちが主役のカンボンの経済は資本主義的なものとはかけはなれたサブシステムな経済であり、毎日カンボンの外へと稼ぎに行く男たちとの分業のあり様は、むしろカンボンを女たちの空間として存立させていることが明らかにされる。ゴシップとアリサン（無尽講）を通じて確立された社会的ネットワークを基盤に女たちが担うインフォーマルな活動は、生活必需品を提供するとともにカンボン内の社会的関係性を維持していく。著者は、カンボンは、自律的であるという意味において「無政府的」なコミュニティであるとみなす。しかし、彼女はこうした議論によって、読者の思考をコミュニティの礼賛に安住させるわけではない。視点は、カンボンの女たちの生活と意識の変容の分析へと転じていく。

冒頭に掲げた80年代以降のジャカルタの街の変貌は、カンボンの女たちの生活意識にも変化をもたらした。特に若い女たちは男たちと同じようにカンボンの外の世界を志向、家業の手伝いよりも工場労働やメイドなどの他の収入源を求め、なかには消費文化に魅せられたあげく生活を維持する以上の収入を望んで、ときに売春に関わっていく者も出てくる。ブロックMの外国人向けバーに出入りする娼婦たちを追い続ける中で著者は、彼女たちがかつてのように貧困の中で必要に迫られているからではな

く、消費そのものために売春に走っていることを知る。マンガライのカンボンにあったような「生きた」下位文化とは無縁な存在となってしまった現代の娼婦たちは、ファッションさえも中産階級の若者になっている、という。

一方、こうした生活の資本主義化、大衆消費社会化の進むジャカルタではもはや堪え忍び強く生きるイブのイメージでさえも国家の戦略に十分貢献しているとは言えない。著者は、女をめぐる支配的イデオロギーがブルジョアジーのセクシュアリティと核家族をモデルとした「主婦」のイメージへと移行しつつあることを指摘する。けれども、現実の主婦たちは家事を用人に任せる消費の奴隷でしかない。ここには女たちによる女たちの搾取が存在している。一方、「主婦」のイメージが作り出す「良き妻」と「市民」の道徳は、カンボンの女たちにも降りかかってくる。ジャワ的な伝統では自律的でありえた下層の女たちは、こうして安価な工場労働力やきらめく首都のイメージを消費する娼婦へと変容を余儀なくされていく、と著者は指摘する。

III

ベンケル劇団のレンドラとも親しく大衆文化にも造詣の深い著者の文章には、学位論文であるにも関わらず、情緒的なものが感じられ、ときとして文学的ですからある。しかし、本書が読み易い研究書の部類に加えられるとしたら、それは問題意識の鮮明さと依って立つフレームの確かさにある。階級の潜在的对立と性差別を隠べいする国家のイデオロギーにこれほどまでに執拗に肉薄した議論は、インドネシア研究においては過去にあまり例がない。

だが、評者としては議論の方向を大筋で評価しつつも、なおいくつかの希望を述べないではおられない。まず指摘されるのは前提とされる理論が緻密さを欠いたままとなっている点である。フーコーの「真理の体制」にしても十分に定義づけられた上での導入ではないし、国家とイデオロギー、そして階級の問題を追うのなら、ルイ・アルチュセールやニコス・プーランツァスらの著作に触れる必要がある。全体を通してネオ・マルクス主義的と見られる問題意識が明確であるだけに、かえって関連する議論が整理されていないことや、あって然るべき概

念装置が未登場のままである点が気になる。また、インドネシア自体に即して言えば、女たちをめぐる体制側の言説の変遷を丹念に追っていく努力がもっとなされるべきではないかと思う。たとえばカルティニについて本書では全く触れられていないが、国民統合の過程で必要とされた彼女のイメージを無視してインドネシアの女とイデオロギーについて語ることができるのか、という疑問が湧いてくる。¹⁾

一方、民族誌として見た場合の本書の内容はどうか。生硬なネオ・マルクス主義的視点の堅持は、フィールドから立ち上ってくる現実が持つはずのみずみずしさをそいではいないか。確かに取り上げられたワルンの女たちや娼婦たちの生活は、著者の数年間にわたる調査なくしては記述不可能なものであったろう。彼女自身、カンボンの日常生活に密着した参与観察の重要性を強調している。にもかかわらず、読み手が本書からマンガライの人々の喜怒哀楽を、あるいはブロック M の喧噪を再構成するには記述に物足りなさを感じられる。著者の言う「行き当たりばったりのアプローチ」(happy-go-lucky approach) が悪いのではない。むしろそうであるが故にもっと濃密な民族誌を期待してしまうのである。娼婦に関する描写がマンガライの女たちに比して少ないのも、彼女たちの存在自体が社会の構造的な歪みを体現していると考えられるだけに残念である。われわれは本書の出版とほぼ同時期に、ジャカルタのカンボン研究の第一人者として著名なリー・ジェリネックの労作²⁾を得ているために、つい辛口の評価をしてしまうのだろうか。

もっとも著者はジェリネックよりも一回りも若い。同年代に属する評者としては、今回は何れともあれ、本書のもつ野心性に声援をおくっておきたい。³⁾ (内藤 耕・常磐大学)

1) もっともカルティニについては、既に土屋健治が本書とは異なる問題意識からそのイメージを詳細に分析している。土屋健治『カルティニの風景』めこん、1991年。

2) Lea Jellinek, *The Wheel of Fortune: The History of a Poor Community in Jakarta*, Allen & Unwin, 1991.

3) なお、本書は東京・木犀社より『ノーマネー・ノーハネー、ジャカルタ』(仮題)として邦訳近刊の予定である。